

生徒の自己発音モニタリングが 正確な発音の定着に与える効果

東京都立白鷗高等学校 教諭 小林 翔

概要

中学で3年間英語を学習してきたにもかかわらず、高校生の英語の発音能力はあまり高くない。調音方法を知らなければ、正確な音を出すことは難しい。また生徒は自分自身の英語の発音を振り返って聞いた経験もほとんどなかった。本研究では、生徒自身の発音の誤りに対する気づきと修正がどのように推移していくのか、モニタリングを繰り返し検証することで正確な発音が定着できるのか、どの程度発音に対する意識は変化するかを分析し、検証した。

調音方法を知り、発音への関心が高くなると、自分の発音に自信が持てるようになる。モニタリングを繰り返すにつれて正確な発音ができる。または自分の誤った発音に気づき、修正もできるようになるという仮説を立てた。調査には公立高等学校1年生41名のデータを取り、事前と中間と事後において、発音に対する意識調査の結果を分散分析の手法で分析した。結果は、すべての項目において事前から事後において発音に対する意識・知識・能力の値が上昇した。次に、発音モニタリングテストの結果を分散分析の手法で分析した。結果は、繰り返し自分の発音を聞くことで、正確に発音する力をつけることができることがわかった。また、自分の発音の誤りに気がつき、注意していれば修正もできることがわかった。

1

はじめに

高等学校学習指導要領では、発音向上のタスクの1つとして、「説明や物語などを読んで、情報や考えなどを理解したり、概要や要点をとらえたりす

る。また、聞き手に伝わるように音読する」というものがある。さらに大学入試センター試験のリスニングテスト実施に伴い、音声指導の重要性がますます増加している。千野（1986）は発音の学習が、リスニングにも影響を与えることを述べている。「発音能力が高まれば、リスニング力も伸びてくる」（静、2013, p.15）。また生徒が自分の発音をよくしたいという意識と関心の高さが発音の正確さに影響を与えている（Shizuka, 1993）。「人は耳に入った音声を自分の発音の方法に照らして解読し知覚するという考え方（言語知覚の運動理論）」（Crystal, 2006, p.49）からも、正確な発音を学ぶ重要性が裏づけられている。音声指導は発話にも影響を与えられている。それは、「自分の脳にない音は発音できない」からである（萩原, 2004）。子音の音がずれ、母音が長すぎ、アクセントの位置が間違っていると、たとえ文脈からの判断を相手に期待しても無理であり、正確な意味は伝わらない（Jenkins, 2002）。

これらの必要性から、今まで指導の中で発音に意識した授業を実施してきた。発音練習では、聞き取った音を自分で発話することで、自分の耳にフィードバックを与えることができる。発音することで、定着したかを確かめることができる（萩原）。指導の中で、発音能力は全体的に上がったと実感している。ところが、少なからず生徒の定着にはばらつきがあり、その発音能力の保持という点では必ずしも満足できるものではなかった。教師がそのつど生徒の発音を直していたので、生徒が意識し、自分で発音を直す機会を奪っていたのかもしれない。発音指導については、効果的な指導法の研究・その方法を紹介する本は数多く存在する。

Futatsuya and Chick (1996) では生徒自身が目標文のモデルを聞き、自分の発音を矯正する研究にすぎない。これまでに生徒自身がどの程度自分の誤った発音に気づくのかに関する研究は Kanai (2012) に存在するが、どの程度修正できるかについての研究はほとんどない。生徒自ら問題を見つけ、誤りを訂正する内省活動を通して、発音への関心が高くなり、自信をつけることができるのではないか。さらに、自分自身の発音をモニタリングすることによって「気づき」を促し、正確に発音する力をつけることができるのではないかと考えたことが、本研究を始めた理由である。

本研究では、上述の理由により、生徒自身の発音の誤りに対する気づきと修正がどのように推移していくのか、モニタリングを繰り返し検証することで正確な発音が定着できるのか、どの程度発音に対する意識は変化するかを検証した。

モニタリングの定義：生徒が自分の声を録音したものを聴き、評価し、誤りに気づけばそれを正しく発音し、修正すること。

2

研究内容

2.1 研究目的

本研究は、上述のようにどの程度生徒は発音の誤りに気づくのか、また気づいたらどの程度修正ができるのか、モニタリングを繰り返し検証することで正確な発音が定着されるのか、またそれによる発音への意識の変化を調べることを目的としている。この目的を実現するために、以下のような仮説を設定した。

仮説1) 調音方法を知り、発音への関心が高くなると、自分の発音に自信が持てるようになる。

仮説2) 最初は正しく発音できず、だめな発音をだめと気づかず、または気づいても修正もできなかったが、モニタリングを繰り返すにつれて正確な発音ができる。

仮説3) モニタリングを繰り返すにつれて自分の誤った発音に気づき、修正もできるようになる。

2.2 参加者

公立高等学校1年生41名を対象に調査を行った。すべての参加者は日本語母語話者であり、英語を第

2言語として学んでいる。

2.3 研究方法

使用した研究方法は、アンケート、発音テスト、モニタリングシートである。

2.3.1 アンケート

発音指導とモニタリングの継続的な実践が高校生の発音能力にもたらした具体的な効果を調べるため、発音に対する意識とR/L/TH/F/V/リズム/についての知識と能力を問う〈アンケート調査〉を、平成25年4月(事前)と平成25年7月(中間)と平成26年2月(事後)に実施した。質問は資料1の28項目で、「全くその通り」、「その通り」、「どちらかと言えばその通り」、「どちらかと言えば当てはまらない」、「当てはまらない」、「全く当てはまらない」の6段階表示で、当てはまるものを1つ選ばせた。このアンケートは意識の変化をとらえることを目的としている。

アンケートは、モニタリングに関する第28項目を除き、大東文化大学の静哲人氏が私立中学校3年生対象の発音授業で実施していたもの(Shizuka, 2008)を用いた。

2.3.2 発音テスト

4月、7月、2月の3回にわたり、発音テストを実施した。発音に気をつけて、感情を込めて、次の原稿をできる限り英語らしい発音でゆっくり正確に1文ずつRead & Look Upするように指示をした。各回の発音テストは英文8文で構成されており、27個のターゲット音を採点対象とし、1問1点として採点を行うようにした。ターゲット音の内訳はそれぞれ、R 6点/L 5点/TH 5点/F 6点/V 3点/N 2点の合計27点。1回目の〈発音テスト〉(資料2)は4月に自己紹介をテーマとした英文を用いて実施した。2回目、3回目(資料3)は授業で使った教科書の単元の要約を内容とする題材を用いて、同じ英文の発音テストを実施した。1回目のテストと2、3回目のテストは英文が全く同じではないが、各英文の長さを同程度に設定し、英文の数、採点対象のターゲット音の数を統一した。

1回目のテストの英文は、静哲人氏が私立中学校3年生対象に使用していたもの(静, 2009)をそのまま用いた。

2.3.3 モニタリングシート

発音テスト後に実験参加者は〈モニタリングシート〉に取り組んだ。発音テストと同じ英文8文で構成されており、実験参加者は発音テストのときに録画された英語を3回聞いて、自分自身の発音を評価した。評価方法は、発音が正しくできていないと思う箇所すべてに下線を引かせた。もし実験参加者が自分の発音が正しくできていると判断した場合は、下線を引く必要はないと指示をした。次に下線を引いた英文を正しく言い直せる場合は、その訂正文のみ Read & Look Up するように指示をし、録画し直した。評価する際、評価の対象は個々の音のみ、ストレスやイントネーションは無視する、評価は厳しめに行うことを注意点とした。

下線が引かれたモニタリングシートは回収し、分析の対象とした。

3

手順

3.1 手順その1

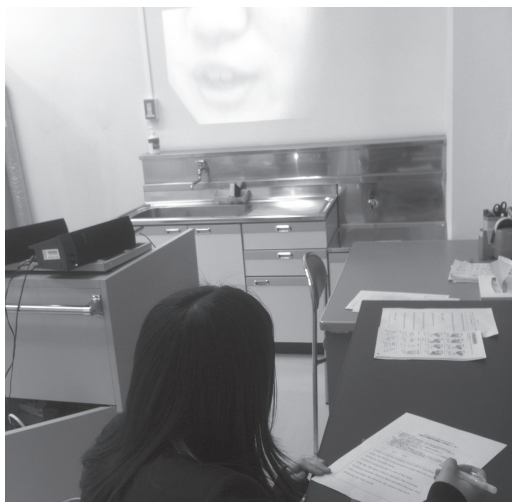
発音テストを Read & Look Up で実施し、ビデオカメラで録画する。



▶ 写真1：発音テスト

3.2 手順その2

生徒はモニタリングシートを用いて、1文または1語ごとに録音した自分の音声を聴き、発音できていないと思う箇所に下線を引く。発音している口を観察することで、より判断の信頼性を高められる(富田・小栗・河内, 2011, p.65)ことから、ビデオで録画した口の動画も見ながら音声を聞いた。



▶ 写真2：モニタリング

例：I really want to enjoy my school life.

3.3 手順その3

発音の誤りに気づいた生徒で自分の発音を修正できる場合は再度修正し、録画する。

訂正例：I really want to enjoy my school life.

4

分析方法

4.1 分析方法その1

質問紙については4月、7月、2月に事前、中間、事後でデータを取り、「繰り返しあり」の一元配置分散分析で優位差を見る。その際、球面性が仮定されない要因については Greenhouse-Geisser 法による修正を採用することにした。また、多重比較においては Bonferroni 法による修正を行った。

4.2 分析方法その2

発音テストに関しても質問紙と同様に4月、7月、2月に事前、中間、事後で3回実施する。次にそれぞれのテストに含まれているターゲット音が正しく発音されていたかどうかを英語の母語話者の教師1名と日本語母語話者の教師1名で判断し、acceptable か unacceptable かに分類する。それぞれの回におけるテストにおいて acceptable と判断されたAグループとBグループの合計点数を「繰り返しあり」の一元配置分散分析で調査する。例：1回のテストにつき、27個のターゲット音×参加者

数41人＝1107点満点を分析の対象とした。その際、球面性が仮定されない要因については Greenhouse-Geisser 法による修正を採用することにした。また、多重比較においては Bonferroni 法による修正を行った。



▶ 写真3：採点

4.3 分析方法その3

発音テストの結果とモニタリングシートを照らし合わせ、ターゲット音を正しく判断できたかどうかを確認し、success か failure に分類、unacceptable and success グループからさらに修正できたか、できなかったかの correction, not correction グループに分類する。

各グループの説明は以下のとおりである。

A グループ：

正しく発音できる＋正しいと判断できる

B グループ：

正しく発音できる＋正しいと判断できない

C グループ：

正しく発音できない＋誤りに気づく

Dグループ：

正しく発音できない＋誤りに気づかない

E グループ：

正しく発音できない＋誤りに気づく＋修正できる

F グループ：

正しく発音できない＋誤りに気づく＋修正できない

このAグループからFグループが4月、7月、2月の事前、中間、事後でどのように推移していくのかを調査した。

5

実験結果

5.1 実験結果その1

仮説1の検証

「調音方法を知り、発音への関心が高くなると、自分の発音に自信が持てるようになる」

発音指導とモニタリングの継続的な実践が高校生の発音能力にもたらした具体的な効果を調べるため、発音に対する意識とR/L/TH/F/V/リズム/についての知識と能力を問う〈アンケート調査〉(資料1)を、平成25年4月(事前)と平成25年7月(中間)と平成26年2月(事後)に実施した結果、有意に差が出た(表1)。

■ 表1：質問紙の多重比較の結果

項目	事前と中間		中間と事後		事前と事後	
	p	d	p	d	p	d
1	< .001*	0.80	0.281	0.35	0.049*	0.50
2	0.151	0	0.003*	0.51	< .001*	0.82
3	< .001*	2	1	0.08	< .001*	2.10
4	< .001*	1.77	1	0.06	< .001*	2.01
5	< .001*	1.04	0.145	0.38	< .001*	1.50
6	< .001*	2.15	1	0.04	< .001*	2.23
7	< .001*	1.71	1	0.08	< .001*	1.78
8	< .001*	0.96	1	0	< .001*	0.99
9	< .001*	1.64	0.872	0.15	< .001*	1.52
10	< .001*	1.12	1	0.08	< .001*	1.13
11	< .001*	0.61	0.164	0.35	< .001*	1.03
12	< .001*	1.75	1	0.07	< .001*	1.82
13	< .001*	1.20	1	0.16	< .001*	1.47
14	0.003*	0.57	0.112	0.36	< .001*	1.04
15	< .001*	1.99	1	0.04	< .001*	2.03
16	< .001*	1.59	1	0.05	< .001*	1.64
17	< .001*	0.89	0.125	0.32	< .001*	1.30
18	< .001*	1.88	1	0	< .001*	1.92
19	< .001*	1.60	1	0.09	< .001*	1.88
20	< .001*	0.89	0.506	0.23	< .001*	1.21
21	< .001*	1.43	0.125	0.37	< .001*	1.90
22	< .001*	0.77	0.224	0.34	< .001*	1.22
23	< .001*	0.51	0.028*	0.36	< .001*	0.85
24	< .001*	1.60	0.009*	0.6	< .001*	2.54

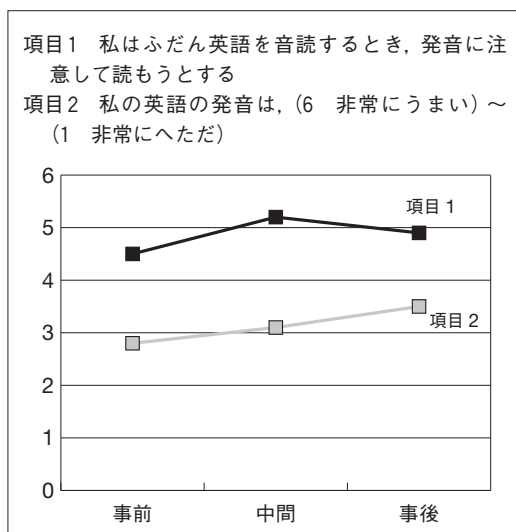
(注)* 平均値の差は .05 水準で有意。

効果量の基準 $d = .20-.50-.80$ 小-中-大 Cohen (1988)

質問紙については、項目28個について信頼性係数 α を出したところ、4項目（1, 4, 5, 6）は修正済み項目がマイナスだったため、これらを除外し、残る24項目について分散分析を実施した。24項目の事前質問紙の信頼性係数は $\alpha = .95$ 、中間質問紙の信頼性係数は $\alpha = .94$ 、事後質問紙の信頼性係数は $\alpha = .93$ であった。

統計解析ソフト SPSS を用いて分散分析を行い、質問項目24個すべてにおいて有意差が確認できた。また効果量 $\text{partial } \eta^2$ についても効果が大きかったことが確認できた。結果は表1のとおりである。

次に、アンケート結果について、それぞれグラフを使い、結果を記述する。
効果量の基準 $\text{partial } \eta^2 = .01-.06-.14$ 小-中-大Cohen (1988)



▶ 図1: 項目1, 2に関する結果の変化

項目1

$F(2, 80) = 9.611, p < .001, \text{partial } \eta^2 = .194$

「事前と中間では大きな変化があることがわかる ($p = .000, d = 0.8$)」

項目2

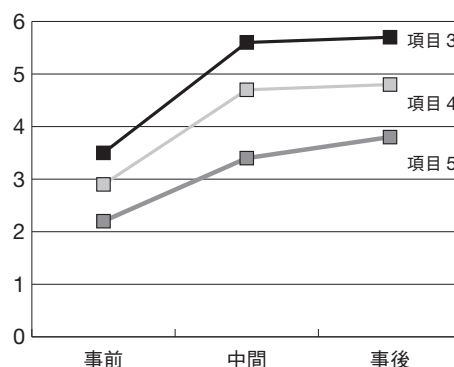
$F(2, 80) = 13.720, p < .001, \text{partial } \eta^2 = .255$

「事前と事後では大きな変化があることがわかる ($p = .000, d = 0.82$)」

項目3 私はRの音 (right, America などの) の発音方法を知識として知っている

項目4 私は注意しているとき、Rの音 (right, America などの) を英語らしく発音できる

項目5 私は特に注意していないときも、Rの音 (right, America などの) を英語らしく発音できる

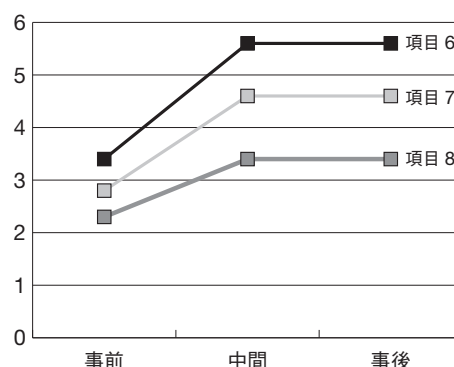


▶ 図2: 項目3, 4, 5に関する結果の変化

項目6 私はLの音 (light, hello などの) の発音方法を知識として知っている

項目7 私は注意しているとき、Lの音 (light, hello などの) を英語らしく発音できる

項目8 私は特に注意していないときも、Lの音 (light, hello などの) を英語らしく発音できる



▶ 図3: 項目6, 7, 8に関する結果の変化

項目3

$F(1.25, 49.90) = 96.959, p < .001, \text{partial } \eta^2 = .708$

「事前と中間 ($p = .000, d = 2$)、事前と事後では大きな変化があることがわかる ($p = .000, d = 2.1$)」

項目4

$F(1.71, 68.31) = 73.47, p < .001, \text{partial } \eta^2 = .647$

「事前と中間 ($p = .000, d = 1.77$)、事前と事後では

大きな変化があることがわかる ($p=.000, d=2.01$)」

項目 5

$F(2, 80) = 38.293, p < .001, \text{partial } \eta^2 = .489$

「事前と中間 ($p=.000, d=1.04$), 事前と事後では大きな変化があることがわかる ($p=.000, d=1.5$)」

項目 6

$F(1.455, 58.200) = 109.141, p < .001, \text{partial } \eta^2 = .732$

「事前と中間 ($p=.000, d=2.15$), 事前と事後では大きな変化があることがわかる ($p=.000, d=2.23$)」

項目 7

$F(1.700, 68.002) = 74.812, p < .001, \text{partial } \eta^2 = .652$

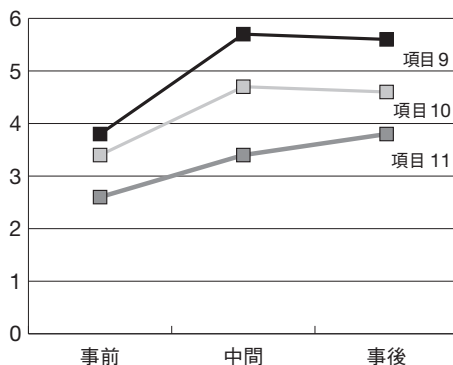
「事前と中間 ($p=.000, d=1.71$), 事前と事後では大きな変化があることがわかる ($p=.000, d=1.78$)」

項目 8

$F(2, 80) = 26.898, p < .001, \text{partial } \eta^2 = .402$

「事前と中間 ($p=.000, d=0.96$), 事前と事後では大きな変化があることがわかる ($p=.000, d=0.99$)」

項目 9 私は澄んだTHの音 (think, thank などの) の発音方法を知識として知っている
項目 10 私は注意しているとき、澄んだTHの音 (think, thank などの) を英語らしく発音できる
項目 11 私は特に注意していないときも、澄んだTHの音 (think, thank などの) を英語らしく発音できる



▶ 図 4 : 項目 9, 10, 11 に関する結果の変化

項目 9

$F(1.260, 50.396) = 62.882, p < .001, \text{partial } \eta^2 = .611$

「事前と中間 ($p=.000, d=1.64$), 事前と事後では大きな変化があることがわかる ($p=.000, d=1.52$)」

項目 10

$F(1.652, 66.064) = 27.616, p < .001, \text{partial } \eta^2 = .408$

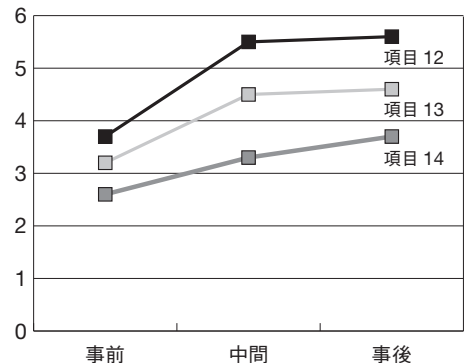
「事前と中間 ($p=.000, d=1.12$), 事前と事後では大きな変化があることがわかる ($p=.000, d=1.13$)」

項目 11

$F(2, 80) = 17.738, p < .001, \text{partial } \eta^2 = .307$

事前と事後では大きな変化があることがわかる ($p=.000, d=1.03$)」

項目 12 私はにぎるTHの音 (the, other などの) の発音方法を知識として知っている
項目 13 私は注意しているとき、にぎるTHの音 (the, other などの) を英語らしく発音できる
項目 14 私は特に注意していないときも、にぎるTHの音 (the, other などの) を英語らしく発音できる



▶ 図 5 : 項目 12, 13, 14 に関する結果の変化

項目 12

$F(1.310, 52.410) = 84.823, p < .001, \text{partial } \eta^2 = .680$

「事前と中間 ($p=.000, d=1.75$), 事前と事後では大きな変化があることがわかる ($p=.000, d=1.82$)」

項目 13

$F(2, 80) = 40.889, p < .001, \text{partial } \eta^2 = .505$

「事前と中間 ($p=.000, d=1.2$), 事前と事後では大きな変化があることがわかる ($p=.000, d=1.47$)」

項目 14

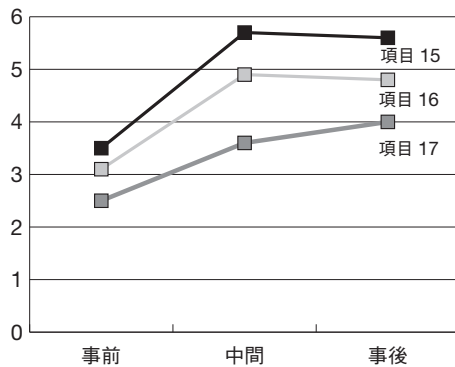
$F(2, 80) = 16.743, p < .001, \text{partial } \eta^2 = .295$

「事前と事後では大きな変化があることがわかる ($p=.000, d=1.04$)」

項目15 私はFの音 (fine, office などの) の発音方法を知識として知っている

項目16 私は注意しているとき, Fの音 (fine, office などの) を英語らしく発音できる

項目17 私は特に注意していないときも, Fの音 (fine, office などの) を英語らしく発音できる

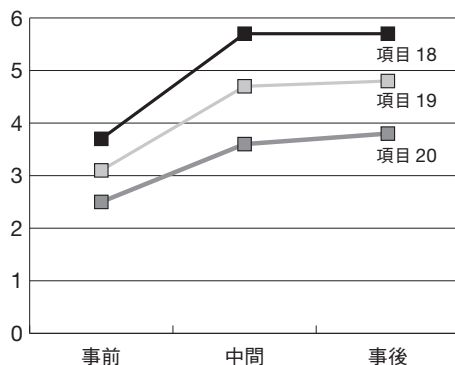


▶ 図6: 項目15, 16, 17に関する結果の変化

項目18 私はVの音 (village, have などの) の発音方法を知識として知っている

項目19 私は注意しているとき, Vの音 (village, have などの) を英語らしく発音できる

項目20 私は特に注意していないときも, Vの音 (village, have などの) を英語らしく発音できる



▶ 図7: 項目18, 19, 20に関する結果の変化

項目15

$F(1.343, 53.716) = 99.343, p < .001, \text{partial } \eta^2 = .713$

「事前と中間 ($p = .000, d = 1.99$), 事前と事後では大きな変化があることがわかる ($p = .000, d = 2.03$)」

項目16

$F(2, 80) = 63.839, p < .001, \text{partial } \eta^2 = .615$

「事前と中間 ($p = .000, d = 1.59$), 事前と事後では

大きな変化があることがわかる ($p = .000, d = 1.64$)」

項目17

$F(2, 80) = 35.519, p < .001, \text{partial } \eta^2 = .470$

「事前と中間 ($p = .000, d = 0.89$), 事前と事後では大きな変化があることがわかる ($p = .000, d = 1.3$)」

項目18

$F(1.183, 47.306) = 92.394, p < .001, \text{partial } \eta^2 = .698$

「事前と中間 ($p = .000, d = 1.88$), 事前と事後では大きな変化があることがわかる ($p = .000, d = 1.92$)」

項目19

$F(2, 80) = 69.052, p < .001, \text{partial } \eta^2 = .633$

「事前と中間 ($p = .000, d = 1.6$), 事前と事後では大きな変化があることがわかる ($p = .000, d = 1.88$)」

項目20

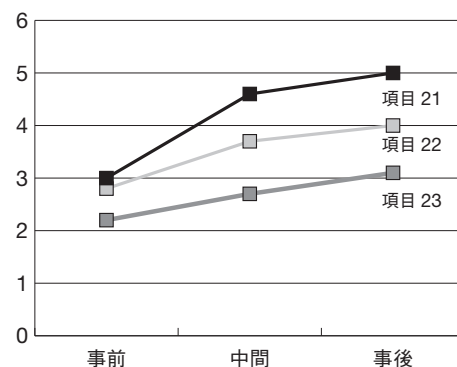
$F(2, 80) = 29.639, p < .001, \text{partial } \eta^2 = .426$

「事前と中間 ($p = .000, d = 0.89$), 事前と事後では大きな変化があることがわかる ($p = .000, d = 1.21$)」

項目21 私は英語らしいリズムとはどういうものか知識として知っている

項目22 私は注意しているとき, 英語らしいリズムで英語を読むことができる

項目23 私は特に注意していないときも, 英語らしいリズムで英語を読めている



▶ 図8: 項目21, 22, 23に関する結果の変化

項目21

$F(2, 80) = 57.835, p < .001, \text{partial } \eta^2 = .591$

「事前と中間 ($p = .000, d = 1.43$), 事前と事後では大きな変化があることがわかる ($p = .000, d = 1.9$)」

項目22

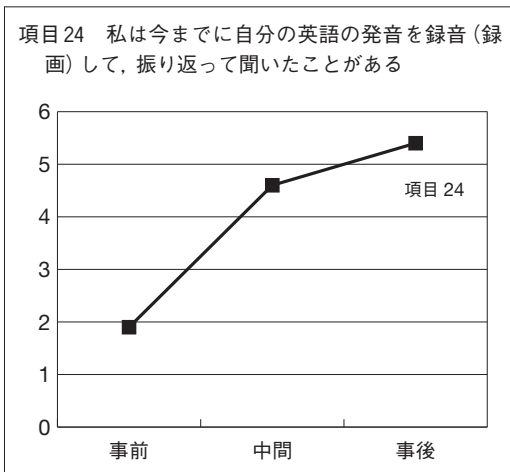
$F(2, 80) = 21.485, p < .001, \text{partial } \eta^2 = .349$

「事前と中間 ($p = .000, d = 0.77$), 事前と事後では大きな変化があることがわかる ($p = .000, d = 1.22$)」

項目23

$F(2, 80) = 19.433, p < .001, \text{partial } \eta^2 = .327$

事前と事後では大きな変化があることがわかる ($p = .000, d = 0.85$)」



▶ 図9: 項目24に関する結果の変化

項目24

$F(1.727, 69.084) = 76.096, p < .001, \text{partial } \eta^2 = .655$

「事前と中間 ($p = .000, d = 1.6$), 事前と事後は大きな変化があることがわかる ($p = .000, d = 2.54$)」

以上の結果から、調音方法を知り、発音への関心が高くなると、自分の発音に自信が持てるようになると結論づけられ、仮説1は支持された。

5.2 実験結果その2

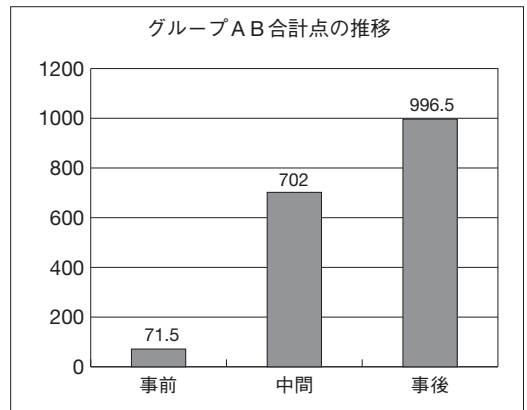
仮説2の検証

「最初は正しく発音できず、だめな発音をだめと気づかず、または気づいても修正もできなかったが、モニタリングを繰り返すにつれて正確な発音ができる」

発音力を測定するテストを実施し、事前、中間、事後の3時点における点数を分散分析で比較した。各回のテストは27点満点である。1回のテストにつき、27個のターゲット音×参加者数41人=1107点満点を分析の対象とした。

次にそれぞれのテストに含まれているターゲット音が正しく発音されていたかどうかを英語の母語話者1名と私の2名で判断し、acceptable (グループA, B) か unacceptable (グループC, D) かに分類した。

本調査で実施した発音テストについて評価者Aと評価者Bの評定者間信頼性を算出したところ、事前テストの $\alpha = .98$ であった。中間テストの $\alpha = .92$ であった。事後テストの $\alpha = .825$ であり、いずれも高い値を得られた。信頼性の基準は、一般的には $\alpha \geq .80$ と考えられている(三浦, 2004)が、Lado (1961)は、スピーキングの評価の場合は $\alpha \geq .70$ でも十分であるとしている。評価者Aと評価者Bにおけるテストの採点結果の平均は図10のとおりである。



▶ 図10: 発音モニタリングテストに関する結果の変化

事前、中間、事後の3時点における得点の記述統計は表2のとおりである。

■ 表2: 発音テストの結果: 記述統計

	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
事前	41	1.7439	2.83091
中間	41	17.9878	4.54765
事後	41	24.3049	1.87709

そして、各時期において、この3時点で得点有意に異なっているかを確認するべく、一元配置分散分析を行った。その結果、すべての時期において、これらの3時点では得点に有意な差があることが示された。一元配置分散分析の結果については、表3のとおりである。

■ 表 3：「繰り返しあり」の分散分析結果（被験者内効果の検定）

Source	SS	df	MS	F	p	ηp^2
時期	11107.821	1.699	6536.313	757.982	p<.001	.950
誤差	586.179	67.976	8.623			

効果量の基準 $\text{partial } \eta^2 = .01-.06-.14$ 小-中-大

効果量の基準 $d = .20-.50-.80$ 小-中-大 Cohen (1988)

■ 表 4：ペアごとの比較

(I) 時期	(J) 時期	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率	平均差信頼区間 95%	
					下限	上限
指導前	指導中	-16.244*	.691	.000	-17.970	-14.518
	指導後	-22.561*	.468	.000	-23.729	-21.392
指導中	指導後	-6.317*	.614	.000	-7.851	-4.783

そこで、各時期の平均に有意差があるかを調べるべく多重比較を行った。球面性の仮説が成り立っていなかったため、Greenhouse-Geisser の自由度の修正を行った。その結果、 $F(1.70, 67.98) = 757.98, p < .001, \text{partial } \eta^2 = .950$ となり、点数に有意差があることがわかった。効果量についても事前と中間と事後それぞれにおいて効果量が大きいことがわかった。事前と中間 $d = 4.29$ 。中間と事後 $d = 1.82$ 。事前と事後 $d = 9.39$ 。Bonferroni の方法を用いて、修正を行ったところ、指導前、指導中、指導後の点数に 5% 水準で有意差が確認された。ゆえに、モニタリングを継続的に繰り返し行うことで、正確に発音できる力を身につける効果があると考えられ、仮説 2 も支持された。結果は表 4 のとおりである。

5.3 実験結果その 3

仮説 3 の検証

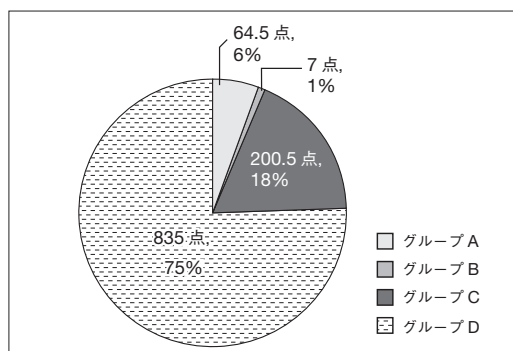
「モニタリングを繰り返すにつれて自分の誤った発音に気づき、修正もできるようになる」

これを証明するために、発音テストの結果とモニタリングシートを照らし合わせ、ターゲット音を正しく判断できたかどうかを確かめ、success か failure に分類、unacceptable and success グループからさらに修正できたか、できなかったかの correction, not correction グループに分類した。4 月、7 月、2 月に事前、中間、事後のモニタリングテスト結果 3 回分を比較し、モニタリングを繰り返すにつれて自分の誤った発音に気づき、修正もできるようになるかを調査した。

■ 表 5：各グループの内訳

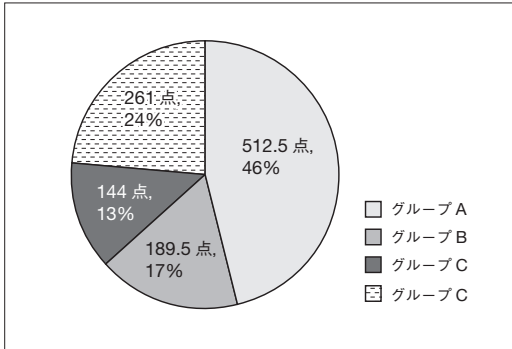
A グループ	正しく発音できる	正しいと判断できる
B グループ	正しく発音できる	正しいと判断できない
C グループ	正しく発音できない	誤りに気づく
D グループ	正しく発音できない	誤りに気づかない
E グループ	正しく発音できない	誤りに気づく + 修正できる
F グループ	正しく発音できない	誤りに気づく + 修正できない

図11は事前発音モニタリングテストの結果をグラフに示したものである。



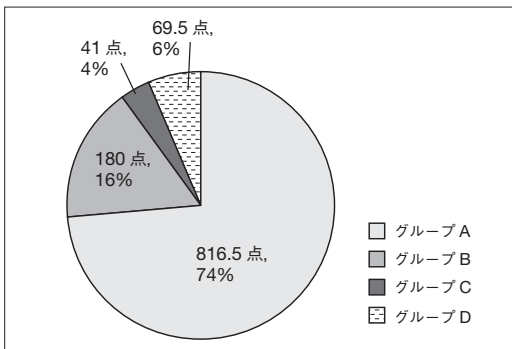
▶ 図 11：事前発音モニタリングテスト結果

図12は中間発音モニタリングテストの結果をグラフに示したものである。



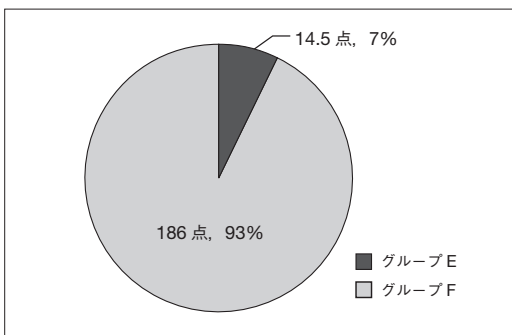
▶ 図12：中間発音モニタリングテスト結果

図13は事後発音モニタリングテストの結果をグラフに示したものである。



▶ 図13：事後発音モニタリングテスト結果

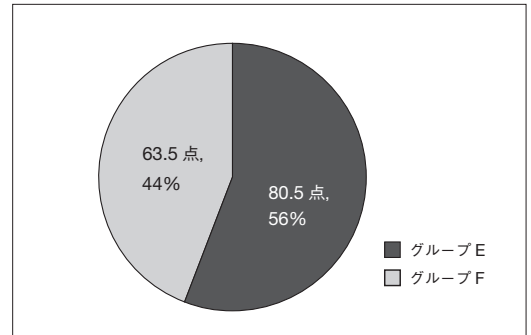
図14は事前モニタリングにおけるEグループ（正しく発音できない+誤りに気づく+修正できる）とFグループ（正しく発音できない+誤りに気づく+修正できない）の結果をグラフに示したものである。



▶ 図14：事前モニタリンググループE, F結果

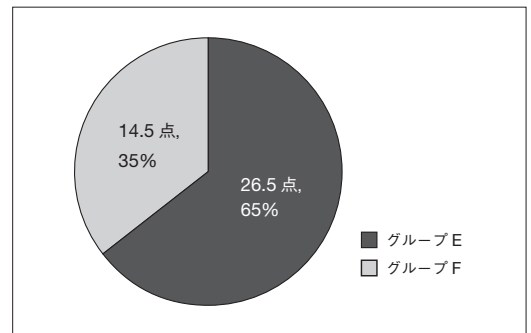
図15は中間モニタリングにおけるEグループ（正しく発音できない+誤りに気づく+修正できる）とFグループ（正しく発音できない+誤りに気づく+

修正できない）の結果をグラフに示したものである。



▶ 図15：中間モニタリンググループE, F結果

図16は事後モニタリングにおけるEグループ（正しく発音できない+誤りに気づく+修正できる）とFグループ（正しく発音できない+誤りに気づく+修正できない）の結果をグラフに示したものである。



▶ 図16：事後モニタリンググループE, F結果

ここで、グループCとグループDのそれぞれの内訳を示す。グループCの割合は事前テスト18%、中間テスト13%、事後テスト4%であった。グループDの割合は事前テスト75%、中間テスト24%、事後テスト6%であった。グループCとグループDにおいて、誤りに気がついたグループCの割合は事前テストが19.3%、中間テストが35.1%、事後テストが40%であった。中間テストでは事前テストに比べ、自分の発音の誤りにある程度気がつるようになってきている。事後テストではさらに発音の誤りに気がつるようになった。モニタリングを繰り返し行うことで生徒は妥当な基準を持ち、自己修正する力がついてきたと言える。

次に、グループE（修正できた）とグループF（修

正できなかった)のそれぞれの内訳を示す。グループEは事前テストでは7%しかいなかったのが、中間テストでは56%になり、事後テストでは65%にまで増えた。グループFの割合は事前テストでは93%もあったが、中間テストでは44%まで減り、事後テストでは35%まで減少した。したがって、モニタリングを繰り返すにつれて自分の誤った発音に気づき、修正もできるようになると結論づけられ、仮説3も支持された。

6

考察

本研究の目的は3つある。

- I： 調音方法を知り、発音への関心が高くなると、自分の発音に自信が持てるようになるのか。
 - II： モニタリングを繰り返し検証することで、正確な発音が定着されるのか。
 - III： どの程度生徒は発音の誤りに気づくのか、また気づいたらどの程度修正ができるのかである。
- 前節の資料と結果に基づいて3つの研究課題への解答としたい。

6.1 目的Ⅰに関する考察

「調音方法を知り、発音への関心が高くなると、自分の発音に自信が持てるようになるのか」

まず、第1の研究課題について論じる。実験結果その1の図1の項目1から音読のときに発音に注意して読もうと意識が変わってきているのが読み取れる。事後アンケートでは中間に比べて少し意識が下がったが、この結果は、他項目で特に注意していないときも英語らしく発音できると答えている人数が増えていることから、ある程度自動化されてきているのではないかと考えられる。

項目2の「英語の発音はうまいか」に関する項目では、へたからうまいに変化し、プラスの影響を与えていることが読み取れる。発音を意識して練習してきたことで、自分自身の英語の発音に自信を持てるようになったことがわかる。

項目3から項目20まではターゲット音に設定したR/L/TH/F/V/についての知識と能力に関する項目である。すべての項目において事前から事後において大きくプラスに変化した。最初はそれぞれのターゲット音の発音方法を知らなかったため、英語らし

く発音できないと感じていたが、発音方法の知識をつけていくにつれ、注意しているときは英語らしく発音できるようになった。しかし、注意していないときは英語らしく発音できないと感じている生徒が少なからずいることから、全員が自動化されるまでには、継続して発音指導をする必要がある。

項目21から項目23まではリズムについての知識と能力に関する項目である。英語のリズムとはどのようなものか知識として身につけ、英語らしいリズムで読むことができてきており、統計的にも有意であった。しかし、全体としてまだ英語らしいリズムで読むことができる状態にはなっていない。参加者の到達度を考慮すると難しかったようである。この結果は、ターゲット音に指定した個々のR/L/TH/F/V/などを正確に発音することに意識が向きすぎて、英語らしいリズムの習得にはつながらなかったことが考えられる。また、モニタリング時において生徒が自分の発音の良し悪しを判断するときに、評価の対象を個々の音のみに限定し、ストレスやイントネーション、リズムに関する採点は除外したため、リズムに関する能力の向上はあまり高くなかったと思われる。

6.2 目的Ⅱに関する考察

「モニタリングを繰り返し検証することで、正確な発音が定着されるのか」

次に、第2の研究課題に関してだが、事前・中間・事後発音テストの得点を一元配置分散分析で調べた。正解率は事前テスト7%、中間テスト63%、事後テスト90%であった。事前テストでは、発音の方法を知らなかったため、ほとんどすべての生徒が正しく発音できていなかった。中間テストでは前回の事前テストから3か月程度しかたっていないにもかかわらず、調音方法を理解し、ある程度正確に発音できるようになってきていることがわかる。事後テストでは事前テストから約1年後に実施し、これまでも2回モニタリングを繰り返し経験してきたため、かなり正確に発音できるようになっている。モニタリングをすることによってself-reflection（内省）が深まり、motivation（動機づけ）が高まったことで、発音力の伸長に効果があったと言える。ここでの発音テストの得点は、グループA（正しく発音できる+正しいと判断できる）とグループB（正しく発音できる+正しいと判断できない）の合計点

数である。その結果は、事前より中間、中間より事後と時期が遅くなるにつれて得点が高くなり、顕著に有意差は現れた。

ここで、グループA（正しく発音できる+正しいと判断できる）とグループB（正しく発音できる+正しいと判断できない）のそれぞれの内訳を示す。グループAは事前テストでは6%しかいなかったのが、中間テストでは46%になり、事後テストでは74%にまで増えた。考察1のアンケート調査で明らかになった発音に関する意識の高さが、発音の正確さに影響を与えたと考えられる。これは、生徒が自分の発音をよくしたいという意識と関心の高さが発音の正確さに影響を与えている（Shizuka, 1993）の結果と一致している。生徒はモニタリングを通して繰り返し自分自身の発音を聞くことで、正確に発音しようという意識が高まったと思われる。この結果から、生徒の発音に関する意識と関心を高められるようにモニタリングを行われることが、発音の正確さを増す原因として重要だということが実証された。

一方、グループBでは、事前テスト1%、中間テスト17%、事後テスト16%であった。生徒が自分の音声の評価するとき、発音ができていないと思った箇所すべてに下線を引き、厳しめに評価してくださいといった指示が影響した可能性もある。正しく発音できていると思っていたにもかかわらず、自分自身の発音が完璧ではなかったため、間違っていると判断してしまったかもしれない。Cheng (2008)によれば、生徒は自己を低く評価する傾向があり、それは心理的影響によるという。正しく発音できているにもかかわらず、自分の発音を間違っていると判断してしまった理由としては、生徒が自分の発音に対して、厳しく評価しすぎていたことが原因の1つとして挙げられるかもしれない。これは、Kanai (2012)の先行研究の結果と同じである。

6.3 目的Ⅲに関する考察

「どの程度生徒は発音の誤りに気づくのか、また気づいたらどの程度修正ができるのか」

次に、第3の研究課題に関してだが、事前・中間・事後発音テストの結果とモニタリングシートを照らし合わせ、ターゲット音を正しく判断できたかどうかを確かめ、unacceptable and success (C グループ)と unacceptable and failure (D グループ)に分類した。さらに、unacceptable and success (C グループ)

から修正できた correction (E グループ)、修正できなかった not correction (F グループ)に分類した。各グループの説明は以下のとおりである。

Cグループ

正しく発音できない+誤りに気づく

Dグループ

正しく発音できない+誤りに気づかない

Eグループ

正しく発音できない+誤りに気づく+修正できる

Fグループ

正しく発音できない+誤りに気づく+修正できない

ここで、もう一度グループCとグループDのそれぞれの内訳を示す。グループCの割合は事前テスト18%、中間テスト13%、事後テスト4%であった。グループDの割合は事前テスト75%、中間テスト24%、事後テスト6%であった。グループCとグループDにおいて、誤りに気づいたグループCの割合は事前テストが19.3%、中間テストが35.1%、事後テストが40%であった。事前テストでは自分の発音の誤りに気づけなかった。調音方法も知らず、正しく発音できていなかったため、自分の発音を聞いてもどこが誤っているのかの判断ができなかったと思われる。この結果は、学習者の能力が十分でないと、自分自身の発音を聞いてチェックすることができないと述べている (Lado, 1964, 186, as cited in Sisson, 1970, 71)の先行研究と一致している。中間テストでは事前テストに比べ、自分の発音の誤りにある程度気づけるようになってきている。事後テストではさらに発音の誤りに気づけるようになった。これは、調音方法を理解し、ある程度正確に発音できるようになったことで、発音の良し悪しの判断ができるようになってきたと言えるのではないだろうか。これは、(Dlaska & Krekeler, 2008, p.507)が「言語能力向上につながる種々の要因のうち、発音、特に自分自身が発し、耳にする発音の良し悪しを考え、その欠点を知り、よりよくしなければと考え、そして、どこをよくしたいのかを考えるというのは学習のとても大切な過程である」と述べているように、モニタリングを通して、生徒は個々の音を聞き取る能力を向上させることができたと言える。また、Lado (1964)も述べているように、いったんある程度の能力を身につけると、自分自身の発

音をチェックできるようになる。しかし、まだ自分の誤りに気づかないグループDの割合は残っている。今後も継続してモニタリングを続けることで、さらに正確に自分の発音を判断できるようになり、誤りに気づくようになるであろう。

次に、再度グループE（修正できた）とグループF（修正できなかった）のそれぞれの内訳を示す。グループEは事前テストでは7%しかいなかったのが、中間テストでは56%になり、事後テストでは65%にまで増えた。グループFの割合は事前テストでは93%もあったが、中間テストでは44%まで減り、事後テストでは35%まで減少した。竹内（2003）によれば、英語の音声習得を促進させる要因には、モデルとなる英語の音声をまず繰り返し聞き、自分の発音をモデルに近づけるように努力した後、自分の発音を録音し、発音のチェックをし、正しくなければ矯正することが必要であると述べている。また、小河原（1998）においても、「学習者が適切な発音基準を意識的にもって発音し、発音した自分自身の発音が基準どおりに発音できているかどうか自分で聴覚的に判定し、自己修正する（p.11）」能力が重要であると述べているように、モニタリングを繰り返し行うことで、生徒は適切な基準を持ち、自己修正する力がついてきたと言える。

以上のことから、モニタリングを繰り返し行うことで、誤った発音に気づくようになり、注意していれば正確な発音で言うことができる（自己訂正できる）ということが明示された。

7

結論と課題

7.1 結論

本実践の目的は、どの程度生徒は発音の誤りに気づくのか、また気づいたらどの程度修正ができるのか、モニタリングを繰り返し検証することで正確な発音が定着されるのか、またそれによる発音への意識の変化を調べることであった。

アンケート調査において発音に対する意識・知識・能力の値がすべての分野で上昇したことから、モニタリングの継続的な実践は、発音力の向上に効果的であると言える。調音方法を学び、繰り返し自分の発音を聞くことで、自信が持てるようになり、正確に発音する力をつけることができることが、今

回の研究からわかった。正確に発音させることで、個々の音を聞き取る能力も向上した。発音力を伸ばすことで、音声に対して敏感になり、自分の発音の誤りに気づき、注意していれば修正もできることがわかった。「音を聞き、発音の練習を重ね、実際に録音をし、自分自身で聞いてみるのが何よりも大切である」（富田・小栗・河内, 2011, p.51）。そういった観点から見ても今回の研究は意義があったと言えるであろう。

今まで自分の音声を録音して聞いたことがない生徒がほとんどであった。定期的に自分の音声を録音し、聞くことで発音を見つめ直し、正確に発音することの重要性に気がつき、改善しようと努力できるようになることがわかった。今後も音声指導の手順、子音や母音など扱う音の順番など多くのことが検証され、指導法が確立されなければならない。その指導法の1つとしてモニタリングは効果があると考えられる。

アンケート調査の結果、発音テストの結果、さらにモニタリングシートや生徒の反応から総合的に判断して、継続的なモニタリングの実践が発音能力の向上に効果的だと言える。しかしながら、発音に対する自信および発音テストの結果がモニタリング以外の授業との相乗効果によってもたらされた可能性を否定することはできない。

7.2 課題

今回の参加者数は41名のみであり、英語が得意な生徒と苦手な生徒が混在していた。人数を増やしても同じ結果を得ることができるかどうか、正確にモニタリングできなかった生徒と英語力との間には何か関係があるのかも調べる必要がある。

正しく発音できているにもかかわらず、間違えていると厳しく判断してしまった割合を減らすことが課題である。これは、アンケート項目2からもわかるように、まだ自分の発音に自信がないことが原因かもしれない。さらに自信をつけさせて、正確に音を聞き取らせる方法を研究し、授業に生かしていきたい。

誤りに気づいたにもかかわらず、修正できない生徒がいた。英文を必死に覚えて、言うことに注意資源が注がれ、トレードオフの関係で発音への意識が犠牲になってしまったのではないだろうか。容易に英文を Read & Look Up できるように、指導していきたい。

評価者を英語の母語話者1名と日本語の母語話者1名で行ったので、もう1人英語の母語話者に評価してもらえれば、さらに信頼性のある評価をすることができるであろう。

ターゲットサウンド(R/L/TH/F/V/N)を個々の音だけでなく、母音も含めたリズムやイントネーションについてもモニタリングすることで、さらに発音力を伸ばすことができるのかについて、さらなる検証が必要である。

謝 辞

本研究を行う機会を与えてくださった公益財団法人日本英語検定協会と関係者の皆様、ならびに選考

委員の先生方に厚く御礼申し上げます。特に本研究を担当していただいた吉田研作先生には、有益な助言ならびにご指導をいただきました。心より感謝申し上げます。

また、大東文化大学大学院の静哲人先生には、筆者が関西大学大学院在籍時より継続的にご指導をいただきました。深く感謝いたします。さらに、関西大学の水本篤先生には本研究に対して統計処理から報告書の作成に至るまで親身なご指導をいただきました。この場をお借りして、御礼を申し上げます。

末筆になりましたが、研究に協力してくださった東京都立白鷗高等学校の生徒の皆様に感謝の意を表します。

参考文献 (*は引用文献)

- 阿部秀樹.(2007).「発音指導におけるインプット強化と意識化の重要性の検証」. *STEP BULLETIN*, vol.19, 125-133.
- 馬場哲生・片桐一彦・小室俊明・高山芳樹・武井昭江・竹田恒美他.(1997).『英語スピーキング論—話す力の育成と評価を科学する』. 東京：河源社.
- * Cheng, Y. (2008). Learning to self-assess oral performance in English: A longitudinal case study. *Language Teaching Research*, 12 (2), 254-255.
- * 千野栄一.(1986).『外国語上達法』. 東京：岩波書店.
- * Coen, J. (1988). Statistical power analysis for the behavioral sciences (2nd ed.). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- * Crystal, D. (2006). *How language works*. London: Penguin Books.
- * Dlaska, A. & Krekeler, C. (2008). Self-assessment of pronunciation. *System*, 36, 506-516.
- 深澤真.(2009).「スピーチにおける生徒相互評価の妥当性—項目応答理論を用いて—」. *STEP BULLETIN*, vol.21, 31-47.
- * Futatsuya, K., & Chick, J. (1996). "Developing and implementing your own pronunciation assessment program." *The Language Teacher*, 20, 8, pp.15-20.
- * 萩原洋.(2004).「臨界期後の英語音声指導のあり方について」.『富山大学教育学部紀要』, 59, 33-42.
- * Jenkins, J. (2002). A sociolinguistically based, empirically researched pronunciation syllabus for English as an international language. *Applied Linguistics*, 23, 83-103.
- * Kanai, M. (2012). An empirical study on pronunciation monitoring ability of Japanese learners of English as a foreign language. *LEO*, 41, 1-25.
- * Lado, R. (1961). *Language testing: the construction and use of foreign language tests*. London: Longman.
- * 三浦省吾.(2004).『教育データ分析入門』. 東京：大修館書店.
- 水本篤・竹内理.(2008).「研究論文における効果量の報告のために—基礎的概念と注意点—」.『英語教育研究』, 31号, 57-66.
- 文部科学省.(2009a).『高等学校学習指導要領』.
- 文部科学省.(2009b).『高等学校学習指導要領解説外国語編英語編』.
- * 小河原義朗.(1998).「外国人日本語学習者の発音学習における自己モニター研究」. 東北大学文学部博士学位論文.
- * Shizuka, T. (1993). "Task variation and accuracy predictor in interlanguage phonology production."『関東甲信越英語教育学会紀要』, 7, pp.63-79.
- * Shizuka, T. (2008). "The effects of a 24-session EFL pronunciation course as reflected in learners' self-reports." *JACET Journal*, 47, 67-80.
- * 静哲人.(2009).「発音トレーニングの効果に対する性別と初期動機づけの影響」. Unpublished manuscript.
- * 静哲人.(2013).『音ティーチングハンドブック』. 東京：アルク.
- * Sisson, R. (1970). The effect of delayed comparison in the language laboratory on phoneme discrimination and pronunciation accuracy. *Language Learning*, 20, 69-88.
- * 竹内理.(2003).『より良い外国語学習法を求めて』. 東京：松柏社.
- 竹内理・水本篤.(2012).『外国語教育研究ハンドブック—研究手法のより良い理解のために』. 東京：松柏社.
- * 田辺正美他.(2013).『PROMINENCE Communication English I』. 東京：東京書籍.
- * 富田かおる・小栗裕子・河内千栄子(編).(2011).『リスニングとスピーキングの理論と実践—効果的な授業を目指して』. 東京：大修館書店.
- 柳瀬学.(2011).『英語スピーキングテストにおける対話者の存在がスピーチパフォーマンスに与える影響』. *STEP BULLETIN*, vol. 23, 81-93

資料 1：アンケート調査

英語発音に関する意識の調査（事前）

____年 ____組 ____番 氏名 _____（ _____年 _____月 _____日）

6（全くその通り） 5（その通り） 4（どちらかといえばその通り）
3（どちらかといえば当てはまらない） 2（当てはまらない） 1（全く当てはまらない）
の中から選んでください。成績とは関係ありませんので、周囲と相談せず、正直に教えてください。
※ すべて同じ番号を選んだりせず、問いごとに、よく考えること。

1) 私は英語を学習する上で、発音は大切だと思っている。	1	2	3	4	5	6
2) 私はふだん英語を音読するとき、発音に注意して読もうとする。	1	2	3	4	5	6
3) 私の英語発音は、（6 非常にうまい）～（1 非常にへただ）	1	2	3	4	5	6
4) 私は、普通の英語の授業で人前だと、わざと日本語的に発音する。	1	2	3	4	5	6
5) 私は、本当は、英語を読むとき、できるだけ英語的に発音したい。	1	2	3	4	5	6
6) 私は日本人として、英語はある程度、日本語的に発音したい。	1	2	3	4	5	6
7) 私は R の音（right, America などの）の発音方法を知識として知っている。	1	2	3	4	5	6
8) 私は注意しているとき、R の音（right, America などの）を英語らしく発音できる。	1	2	3	4	5	6
9) 私は特に注意していないときも、R の音（right, America などの）を英語らしく発音できる。	1	2	3	4	5	6
10) 私は L の音（light, hello などの）の発音方法を知識として知っている。	1	2	3	4	5	6
11) 私は注意しているとき、L の音（light, hello などの）を英語らしく発音できる。	1	2	3	4	5	6
12) 私は特に注意していないときも、L の音（light, hello などの）を英語らしく発音できる。	1	2	3	4	5	6
13) 私は澄んだ TH の音（think, thank などの）の発音方法を知識として知って	1	2	3	4	5	6
14) 私は注意しているとき、澄んだ TH の音（think, thank などの）を英語らしく発音できる。	1	2	3	4	5	6
15) 私は特に注意していないときも、澄んだ TH の音（think, thank などの）を英語らしく発音 できる。	1	2	3	4	5	6
16) 私はにござる TH の音（the, other などの）の発音方法を知識として知っている。	1	2	3	4	5	6
17) 私は注意しているとき、にござる TH の音（the, other などの）を英語らしく発音できる。	1	2	3	4	5	6
18) 私は特に注意していないときも、にござる TH の音（the, other などの）を英語らしく発音 できる。	1	2	3	4	5	6
19) 私は F の音（fine, office などの）の発音方法を知識として知っている。	1	2	3	4	5	6
20) 私は注意しているとき、F の音（fine, office などの）を英語らしく発音できる。	1	2	3	4	5	6
21) 私は特に注意していないときも、F の音（fine, office などの）を英語らしく発音できる。	1	2	3	4	5	6
22) 私は V の音（village, have などの）の発音方法を知識として知っている。	1	2	3	4	5	6
23) 私は注意しているとき、V の音（village, have などの）を英語らしく発音できる。	1	2	3	4	5	6
24) 私は特に注意していないときも、V の音（village, have などの）を英語らしく発音できる。	1	2	3	4	5	6
25) 私は英語らしいリズムとはどのようなものか知識として知っている。	1	2	3	4	5	6
26) 私は注意しているとき、英語らしいリズムで英語を読むことができる。	1	2	3	4	5	6
27) 私は特に注意していないときも、英語らしいリズムで英語が読めている。	1	2	3	4	5	6
28) 私は今までに自分の英語の発音を録音（録画）して、振り返って聞いたことがある。	1	2	3	4	5	6

（注）静哲氏氏の提供による（事前調査の第28項目を除く）。

英語発音に関する意識の調査 (中間・事後)

____年 ____組 ____番 氏名 _____ (____年 ____月 ____日)

6 (全くその通り) 5 (その通り) 4 (どちらかといえばその通り)
 3 (どちらかといえば当てはまらない) 2 (当てはまらない) 1 (全く当てはまらない)
 の中から選んでください。成績とは関係ありませんので、周囲と相談せず、正直に答えてください。
 ※ すべて同じ番号を選んだりせず、問いごとに、よく考えること。

1) 私はふだん英語を音読するとき、発音に注意して読もうとする。	1	2	3	4	5	6
2) 私の英語発音は、(6 非常にうまい) ～ (1 非常にへただ)	1	2	3	4	5	6
3) 私は R 音 (right, America などの) の発音方法を知識として知っている。	1	2	3	4	5	6
4) 私は注意しているとき、R の音 (right, America などの) を英語らしく発音できる。	1	2	3	4	5	6
5) 私は特に注意していないときも、R の音 (right, America などの) を英語らしく発音できる。	1	2	3	4	5	6
6) 私は L の音 (light, hello などの) の発音方法を知識として知っている。	1	2	3	4	5	6
7) 私は注意しているとき、L の音 (light, hello などの) を英語らしく発音できる。	1	2	3	4	5	6
8) 私は特に注意していないときも、L の音 (light, hello などの) を英語らしく発音できる。	1	2	3	4	5	6
9) 私は澄んだ TH の音 (think, thank などの) の発音方法を知識として知っている。	1	2	3	4	5	6
10) 私は注意しているとき、澄んだ TH の音 (think, thank などの) を英語らしく発音できる。	1	2	3	4	5	6
11) 私は特に注意していないときも、澄んだ TH の音 (think, thank などの) を英語らしく発音できる。	1	2	3	4	5	6
12) 私はにごる TH の音 (the, other などの) の発音方法を知識として知っている。	1	2	3	4	5	6
13) 私は注意しているとき、にごる TH の音 (the, other などの) を英語らしく発音できる。	1	2	3	4	5	6
14) 私は特に注意していないときも、にごる TH の音 (the, other などの) を英語らしく発音できる。	1	2	3	4	5	6
15) 私は F の音 (fine, office などの) の発音方法を知識として知っている。	1	2	3	4	5	6
16) 私は注意しているとき、F の音 (fine, office などの) を英語らしく発音できる。	1	2	3	4	5	6
17) 私は特に注意していないときも、F の音 (fine, office などの) を英語らしく発音できる。	1	2	3	4	5	6
18) 私は V の音 (village, have などの) の発音方法を知識として知っている。	1	2	3	4	5	6
19) 私は注意しているとき、V の音 (village, have などの) を英語らしく発音できる。	1	2	3	4	5	6
20) 私は特に注意していないときも、V の音 (village, have などの) を英語らしく発音できる。	1	2	3	4	5	6
21) 私は英語らしいリズムとはどのようなものか知識として知っている。	1	2	3	4	5	6
22) 私は注意しているとき、英語らしいリズムで英語を読むことができる。	1	2	3	4	5	6
23) 私は特に注意していないときも、英語らしいリズムで英語が読めている。	1	2	3	4	5	6
24) 私は今までに自分の英語の発音を録音 (録画) して、振り返って聞いたことがある。	1	2	3	4	5	6

資料 2 : 第 1 回発音テスト

- ① Hi. I'm (自分の下の名前).
- ② I'm a first year student at this school.
- ③ I live in () ku/city.
- ④ I'm from (出身中学名) junior high school.
- ⑤ Everything was fun.
- ⑥ but the greatest fun was talking with my best friends.
- ⑦ I really want to enjoy my high school life.
- ⑧ Thank you very much!

(注) 静哲人氏の提供による。

資料 3 : 第 2 回・第 3 回発音テスト

- ① Chirori and her puppies were left in a garbage room.
- ② Mr. Oki found some people to look after the young ones.
- ③ Chirori was left alone.
- ④ Chirori acted kindly to one of the dogs.
- ⑤ So Mr. Oki gave Chirori therapy dog training.
- ⑥ Chirori became Japan's first certified therapy dog.
- ⑦ To remember her forever, the statue was built.
- ⑧ Thank you very much.

(注) PROMINENCE Communication English I の本文を使用。